《令和元年度定年退職者慰労会の記録》

定年を迎えて

坂本武憲
（法学部教授）

昨日（三月一一日）で、東日本大震災から丁度九年の歳月が経過いたしましたけれども、本学がこの震災から受けたダメージを克服して、本日に予定されていました１４０年記念館の落成式という喜びに至るこの九年間を思い返しましても、私は本学が様々な課題に直面しながら辿ってきた、これまで一四〇年の日々の貴さを、今更ながら実感しております。私たちはこの輝かしい伝統を誇る本学に奉職させていただき、このたび定年を迎えまして、卒業生と時を同じくして、深い感謝の気持ちとともに本学を去ることとなりました。幸いにも、私たちがこの間、目の当たりにしてまいりましたのは、力強い専修大学の姿でありました。１２０年記念館・１３０年記念館・１４０年記念館をはじめとする施設の充実は、目を見張るものがあり、また毎年の卒業式と入学式では、会場にあふれんばかりの学生とご父母の光景に、いつも感動の思いを新たにしてまいりました。

私たちはまた、本学の進取の精神にも深く接することができました。人間科学部や国際コミュニケーション学部の新設、学部の再編や校舎の建設など、社会の状況やニーズに対応した機敏な英断が、学内のコンセンサスを得ながら、行われてきた経緯は、本学の誇りうる新たな歴史のページとなってゆくものと、確信しており

ます。

こうして私たちが、在職中に目にし、接してきたものは、本学が創立者から受け継いできた「報恩奉仕」「質実剛健」「誠実力行」の精神に強く結びついており、そしてこれらを二一世紀に生かしたビジョン「社会知性の開発」の目標に確かに連なっていることにも、印象深く気付くところであります。

もちろん、開学一四〇周年を迎える本年が、新型コロナウイルス騒動で始まりましたように、これから本学にはいくつもの試練が訪れることと思います。しかし私たちは、全く心配しておりません。ただ、長くスタッフであった者として、末永く本学の歩みを見守り続け、応援してまいりたいと、心から願っております。

これからも本学の伝統がますます息づき、そこに進取の精神が加わりまして、本学が更なる発展へと向かい、輝かしい一五〇周年・一六〇周年を迎えられますように、衷心より祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

※この原稿は、令和二年三月一二日（於ホテルグランドパレス）の定年退職者慰労会における坂本武憲先生のご挨拶です。先生は、長年にわたり本学の教育・研究活動ならびに大学運営に貢献してくださいました。本学にゆかりのある皆さまへ先生のお言葉をお伝えしたく、本号に掲載させていただきました。